

カンキツの重要害虫「ゴマダラカミキリ」について

果樹試験場 衛藤友紀

今月は、主にカンキツで問題となる「ゴマダラカミキリ」について説明します。

一生 態

成虫の体長は2.5～3.5cm程度、体色は光沢のある黒色であり、4枚ある翅のうち前翅(堅い翅の部分)には複数の不規則な白斑があります。なお、触角の各節の色も黒と白で構成されています。このように特徴的な体色をもつことから、和名(ゴマダラカミキリ)もこの特徴に由来するようです。雌雄ともに同じような体色をしていますが、雄の触角の長さは体長より長いものに対して、雌の触角は体長より短く、また雄の身体は雌よりも小型の場合が多いことから、雌雄の区別ができます。

本虫は、カンキツ類を加害する害虫として知られていますが、寄主植物は意外と広く、ヤナギ、クリ、クワ、イチジク、プラタナス、シラカバ等のように果樹を含め街路樹も加害します。このように街路樹も加害することから、山間部だけではなく、都市部でも本虫を目にすることがあり、そのため周囲にカンキツ園地がないような庭先のカンキツ樹でも被害を受けることもあります。

成虫は、寄主植物であるカンキツ等から6～7月にかけて羽化し、羽化後は産卵のために葉や緑枝の皮を盛んに食害します。その後、雌雄は交尾をして、雌はカンキツ樹を大顎で傷を付け、その傷口に長さ3mmの楕円形で乳白色の卵を産下します。孵化した幼虫は孵化当初は樹皮下の部分(形成層)を食害しますが、成長するにともなって、木質部の深くまで侵入して、食害します。ちなみに、産卵痕では「樹液:ヤニ」が出たり、また幼虫による食害が始まると、大量の「木屑等」が樹の外部に溢れ出してきますので、被害の目安となります。幼虫はその後樹体内で蛹となり、羽化した成虫は幹に円形の穴を開けて、野外に脱出します。

近年の研究により雌成虫の平均産卵数は約200卵、中には400卵に達する個体もあったそうです。また、産卵時期は6～10月とされていますが、主な時期は6～7月にかけてです。さらに、遅い時期に産下され、孵化した個体の羽化は、翌年ではなく、さらに次、つまり2年後に羽化するようです。このようにゴマダラカミキリは、成虫になるまでに1年または2年を要する個体があります。

一被 害

成虫による葉および枝の被害においては大きな問題となることは少なく、一番深刻なのは幼虫による被害です。幼虫による食害で、枝の枯死、さらには樹勢が低下して、枯死に至ることもあるので、経済的な被害は甚大です。そのため、防除としては、交尾する、卵を産み付ける「成虫=雌雄」を対象とする場合、被害が問題となる「幼虫」を対象とする場合に分けられます。

一防除対策

●耕種的防除:最も簡単な方法は捕殺です。昔は、各農協が捕殺した成虫を買い取っていたようです。そのため、農業大学の授業中(平成5年頃)に学生にゴマダラカミキリの

写真を見せて、昆虫の名前を尋ねたら、「10円虫」という回答がきました。つまり、ゴマダラカミキリが彼らのお小遣いになっていたのです。そのため、このようにネーミングがされたのでしょうか。このように昔は地域をあげて、本虫の密度低下に努めていました。摘果等の普段の管理をしている際に見かけたら、必ず捕殺します。ちなみに、気温が低い早朝にゴマダラカミキリがいる樹を揺さぶると、落下して、捕まえやすく、気温が高まる午後には揺さぶると飛翔するので、注意が必要です。また、品種更新により、幼木が定植されている園地も多いと思います。成木以上に被害が深刻となるので、防除を徹底します。写真のような防虫ネット等を巻き付けて成虫の産卵を抑制することも大切です。

幼虫が樹に侵入した場合も捕殺します。産下された小さな卵を探すことは難しいので、幼虫の食害の目安となる「木屑」を見つけたら、幼虫を潰します。幼虫を潰す道具としては、経験的に「マイナスイライバー」と「クリーニングの鉄製ハンガー」が便利でした。ドライバーは鋭利で、強度がありますので、樹皮を削る際に役立ちます。一方、ハンガーも強度があり、また形を自由に変えることが出来るので、木質部の奥深く侵入した幼虫を潰す際に役立ちます。また、成虫は地際部に産卵する傾向があります。地際部の様子が分かるように除草も大切です。

●薬剤防除：一昔前は成虫および幼虫を対象にスプラサイド剤等の有機リン剤が主に使われていました。本系統薬剤は比較的安価であり、一部の薬剤はカイガラムシ類との同時防除が可能です。その一方、県内の一部の産地において、スプラサイド剤に対して感受性が低下した個体群が発生していますので、本剤を散布しても成虫の発生が目立つ園地（産地）では薬剤の選択に注意が必要です。

平成に入り、モスピラン剤、ダントツ水溶剤、オリオン水和剤40等が登録されたことに加え、近年ではエクシレルSE、ハチハチフロアブル等の新系統の薬剤も登録されています。それぞれ、ゴマダラカミキリ成虫を含め各種害虫に対しても登録があるので、園地（産地）の状況に応じて薬剤を選択します。例えば、新梢の発生が盛んな幼木では、ミカンハモグリガやアゲハ類との同時防除を目的として、エクシレルSE等を散布します。一方、成木園においてアザミウマ類やカイガラムシ類が問題となる場合はダントツ水溶剤等、ミカンサビダニの場合はハチハチフロアブルを選択します。

一昔前の幼虫防除としては、有機リン剤の高濃度処理でした。しかし、本剤の利用は、①散布剤の高濃度処理は、薬液が枝葉に飛散すると薬害を生じる、②塗布剤の夏季の樹幹処理は重労働である等の問題点がありました。一方、近年は一般家庭でも馴染みのある「噴霧剤」が登録されています。商品名は「ロビンフード」、「園芸用キンチョールE」です。使用する際は、幼虫に可能な限り近づけるように、先述の幼虫食入の目安である「木屑」をきれいに取り除き、ノズルを食入口深く挿入して、噴霧します。

現在、さらに新しい薬剤がゴマダラカミキリに対する登録の取得を目指しています。県果樹試験場では、農薬選択の幅が少しでも広げることができる等、生産現場の一助となるように、農薬登録を行うための防除試験を積極的に行っています。登録にはもう少し時間が必要ではありますが、期待して待っていただければ幸いです。



ゴマダラカミキリ成虫



ゴマダラカミキリ幼虫



成虫による枝の食害痕



幹から溢れ出た木屑等



衰弱した被害樹



産卵抑制のための防虫ネット